

を傳へ、連歌の宗匠宗祇は大内政弘に招ぜられて山口に赴き筑紫道記を残した。土民の一揆は此頃も頻々起つて幕府の設けた京七口の關所をも撤去するに至つたが、十輪院内府記に月並の下剋上の代りに上輕下強の語を用ゐてゐるのも面白く、大乘院寺社雜事記に「悉皆下より天下を可成敗分候」といつてゐるのは餘りにヒステリックである。幕府に忍入つて寶刀を盗み出した盗人を捕へて見れば、意外にも忍びの名人といはれた賀茂の氏人二人であつたから、大路を渡して首を斬り三日の間河原に梟首した上に、其母と妻とを水刑に處してゐるのも時代粧の一つの現れである。幕府が島津氏に命じて亂中來聘を處つた琉球の入貢を促したのは琉球の所屬を示すべき有力な史料と見られる。本巻に收められた爲めに現れた史料の主なるものに東山御文庫本の御湯殿上日記の完本や十輪院内府記等があり、關東の大震災災の犠牲になつた歴代殘闕日記の記録も亦貴い名残といはねばならぬ。又朝鮮に關したのものには李氏實錄があり、これに據つて朝鮮と日本及び琉球との交通關係をも徴するこゝが出

来る。本巻に挿入の寫真には二條政嗣自筆の消息がある。因に本書の希望者は發行所に申込めば定價金七圓を以て頒布を受けらるゝといふ。(菊版一、〇三三頁、東大史料編纂掛發行)〔三浦〕

● 往來物落穂集

石川 謙編

文化の發達を研究する上に於いて教育方面の史的考察は最も必要な事項である事は言ふまでもないが、それに要する資料の蒐集と精選とが未だ充分に行はれて居らぬから、この缺陷を補はんが爲めに著者は往來物全集を出版する計畫を有して居り、先づ往來物の教育史的意義を考察する上に最も必要なものゝ一部を選択し、且つ其の目的を達するに便利の多い排列法により次第して著されたのが本書である。本書は全體を四編に分ち、第一編寺子屋史總觀を第一章寺子屋についての文獻、第二章文學に表はれたる寺子屋とし、第二編、訓育上の教科用書を第一章寺子教訓に關するもの、第二章一般教訓に關するものに分ち、第三編地理科に關する教科用書を第一章自造型に屬するもの、第二章國畫型に屬するもの第三章

都路型に屬するもの、第四章詣型に屬するものに分ち、第四編歴史科に關する教科用書を第一章古文書型に屬するもの、第二章傳記型に屬するものに分ちて種々の往來物を收録されてゐるのは近世庶民教育の研究者に多大の裨益を與へるのみでなく、兼て又其の中の地理科に關する編中のものは各國の交通産業名所風俗等の狀況を知る上にも少からず參考となるのである。吾人は本書下巻並に往來物全集の早く世に出でんことを切望する。(菊版三〇二頁、東京文修堂發行、價一、九〇)(松野)

● 宮内省圖書寮本西遊錄 元耶律楚材著

元の耶律楚材、湛然居士は遼の東丹王八世の孫に當り、蒙古の太祖太宗に歴史するこゝ前後三十餘年、元朝施政の大本は大抵居士の計畫する所に出で、元朝の賢臣として有名な人物である。『湛然居士集』『西遊錄』等の名著の中にも殊に『西遊錄』は元初の西域の事情を徴すべき好個の紀行なるが從來支那の藏書家は之を輕視せしか、殆んそ本書を著録する者無く、近頃海外學者が遼金元史の研究、支那西北地理の探究を爲すに至りて、始め

て本書が史料として絶大の價値も有するこゝが知られ、ブレットシュナイデル氏が始めて英文に翻譯して西洋の支那學者に紹介したのである。然るに通行の西遊錄は原著を遠ざかるこゝ迄にして、而も抄録に止まり、學者皆その完本を觀得ざるを以て恨こした。神田文學士宮内省圖書寮所藏の祕笈を調査せらるゝや、偶々古賀家より獻上せし書籍の中に、侗菴先生の手録せしものこ考へらるゝ西遊錄一本の存するを發見せられた。その跋文に徴して侗菴先生が鄧林なる人の所藏本より抄録せしこゝを知り得るこ共に、鄧林は又、京都東福寺塔頭普門院の開祖聖一國師の所藏本より鈔録したものであるこゝが明かである。國師は四條天皇の嘉禎二年即ち蒙古太宗の七年に入宋せし名衲であつて恰も耶律楚材と同時代に生存入宋せし譯なれば、國師が歸朝の際に本書を將來せしならむこゝは申すまでも無く、その將來本は必ずや印刷刊行本たりしに相違ない。末尾に燕京中書侍郎宅刊行とあるは之を證して餘ある。又之によりて本書の刊行が蒙古太宗の三年以後に行はれたるこゝをも知り得るのである。然